
遊戯王5D's ~ 英雄の影 ~

虚鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's 英雄の影

【Nコード】

N3384R

【作者名】

虚鏡

【あらすじ】

それまで日常を過ごしていたあたしの腕に突然爪痕が浮かび上がった。現れたあたしの相棒にあたしはシグナーを護るためのシグナーだと告げられる。シグナーを護ると誓ったあたしを待ち受けるのは、過酷な闘い。

0、長話は受け付けない(前書き)

5D・sが間もなく終わりを迎えると思うと寂しくてつい衝動で書いたものです。

亀よりもろく更新していきます。

あたたかく見守っていただけると嬉しいです。

0、長話は受け付けない

この日あたしは不幸は連続して起こるものだと思った。

まず最初に朝起きた途端急に喉が痛くなり、次に昼の散歩に出たら何故か不良共と遭遇してイチャモンつけられ（もちろん全員病院送りにしてやったが）、夜の散歩にシャレこんだら白いD・ホイールに轢き殺されかけ（あれ絶対ホイール・オブ・フォーチュンだった！「ジャック・アトラスだよ！後ろについてた赤いD・ホイールの人がすれ違い様謝ってくれたから特別に許してやるけどさ！）、ラジオを聞こうとスイッチをいれようとしたら停電が起きて、そんなもって、現在進行形で右腕が痛い！

しかも爪痕みたいな痣が出てるし！何か赤く光ってるし！何コレ！？今までこんなの無かったのに！

今なら某 イト・ノルの主人公の気持ちがよくわかる。

確かに叫びたくなる。あの例の言葉を。

でも言わない。根性で耐えてみせる。

叫んだら近所迷惑になるしね！

【・・・そんなに痛いかな？】

そりゃもう！・・・って。

「え？」

ここにはあたししか住んでないはずなのに。

まさか痛みあまり幻聴が・・・！

うわっ、恥ずかしい。

「痛みで幻聴とか・・・子供みたい・・・」

【失礼だな。安心しろ、幻聴じゃない】

幻聴に幻聴じゃないとか言われたよ。
あたし超痛い人……。

【信じられないなら顔上げて確かめろ】

幻聴に正論言われてちよつとムカツとしたけどその通りだ。
分からないなら確かめりゃいい。

腕の痛みを我慢して顔を上げてみたら……白と黒の翼をし
た灰色のボディのドラゴンが目の前にいました。

あんたの頭大丈夫？なんて目で見ないで。本当だから。
しかもただのドラゴンじゃない。

デュエルモンスターズのカードのドラゴンだ。
それも、あたしの相棒にしてエースモンスター！

「……ヤバい。幻覚まで見だすなんて……あたし、そこまであ
んたに頼らなきゃいけないほど情けなかったのかな……。ごめん、
カオス・オブ・グレイストドラゴン
混沌の灰竜。あたしあんたの主人失格かも……」

【おいおい、そこまで落ち込むことか？幻聴じゃねえし幻覚でもね
えよ。それに失格だなんて勝手に決めるな。例えどんなに情けなく
ても、俺の主はお前だけだ】

「うつつ、ありがと……幻聴でも嬉しい……」

【だから幻聴じゃねえって！信じられないのは無理ねえけどよ、俺
はカオス・オブ・グレイストドラゴンで、お前のドラゴンだ……】

ちよ、やめてよ。

そんな泣きたそうな声でそんなこと言わないでよ！

あたしが悪いみたいじゃん！

事実悪いだろって？やかましい！

「わかったわかった！信じるから泣かないでよ！」
【いや、泣いてはいないんだが・・・まあ、信じてくれるなら何でもいいや】

お、元気になった。

「んで、グレイスドラゴン。あたしに一体何の用？」

【ああ、伝える時がきたと思ってな】

「何を？てか、腕まだちょっと痛いからさ、もうちょっと後じゃダメ？」

【その痛みと爪痕の説明も兼ねてるぞ】

「どうぞ続けてくださいーい」

グレイスドラゴンがふっと笑った気がした。

【それじゃあ伝えよう我が主。遙か昔の5000年前の話を】

そんなに昔の話なんかいい！

話めっちゃ長くなりそうな予感。

【とはいえ、主は長ったらしい話は嫌いだろうか？端折りながら話すぜ】

「ありがとうございます。あたしのことよく理解してらっしゃいますね」

【何十年の付き合いだと思ってやがる。5000年前に赤き竜が五体の竜と共に邪神と戦い、見事勝利して封印したその後・・・】

「いきなり！？待って待って端折りすぎ！何赤き竜って！？五体の竜！？邪神！？What!?!」

【・・・赤き竜とは3000年前に当時の星竜王が邪悪な戦乱を治めるべく竜の星に祈りを捧げた時、竜の星が応えた結果として召喚された神の化身のことだ。五体の竜というのは、シグナーが使役する竜のことだ】

「何シグナーって」

【後でちゃんと言うから待て。邪神とはそのまんまの意味だ。省く
いやいや省いちゃダメだろ。
でも長くなりそうだから口挟まないでおこう。】

【封印をした後、赤き竜は頭・翼・手・足・尻尾の5つに分かれて竜の痣となって人間界に封印された。シグナーの竜と共に、再び戦うために。ついでに説明するが、シグナーとは竜の痣を持つ人間のこと、赤き竜の戦士」とも呼ばれている】

「・・・シグナーは何と戦うの？」

【ダークシグナーと】

「・・・。何となく分かった。つまり、昔から続いているシグナーとダークシグナーとの戦いが、今起ころうとしてるわけね」

【その通りだ】

「で？それがあたしと何の関係があるの？シグナーの証である痣は頭・翼・手・足・尻尾の五つでしょ？でもあたしは違うわ。これは爪痕よ。どれにも当て嵌まらない」

【こつからが本題。よく聴け。主の言う通り、主の腕に浮かぶ痣はどれにも当て嵌まらない。だけど主はシグナーなんだ。シグナーを護るための、シグナーなんだ】

「・・・は？」

【歴史には残っていないがな】

「んなことどうでもいいわ！シグナーを護るためのシグナーってどういう意味？」

【その前にダークシグナーの説明をするぞ。ダークシグナーは冥界

の亡者だ】

「はい？亡者って・・・死人ってこと？」

【そうだ。強い生への執着を持ったまま死した人間に地縛神が憑依し、その力を得て蘇させられた人間がダークシグナーだ】

「めちやくちやね。その地縛神ってのは何？」

【地縛神は、5000年前の戦いにおいて赤き竜とシグナーのドラゴンによってナスカの大地に封印された邪神のことだ】

あ、結局邪神の説明もした。

てかもうこの時点で話十分長いわ。

【主、寝るなよ？まだ説明は続くぞ。地縛神の中にはダークシグナーですら手におえない地縛神がいる。一匹は『地縛神スカーレット・ノヴァ』。こいつは1万年前の戦いで赤き竜を追い詰めた程の強大な力の持ち主だ】

「でも勝てたんだ」

【何とかな。もう一匹は『地縛神Amaru』。こいつは主同様、歴史に存在しない地縛神だ】

「つまりそれって、あたしが相手しなきゃいけない敵ってことよね」

【ああ。こいつも厄介な存在だ。こいつが憑依するのは死者じゃない。生者だ。心に大きな闇を持つ者のな。そして、あいつに憑かれた人間は、あいつが離れた瞬間に死ぬ】

「・・・」

【あいつが憑依した人間と戦い勝っても、ヤツは別の存在に憑くだけ。幸いなのはヤツが憑依していた人間から別の相手に憑依できるのは自分に勝負で勝った人間だけってことだ。負けた後に憑依しなければ、あいつもまたしばしの眠りにつく】

「・・・そういつから護るためにいるのが、シグナーを護るシグナーってわけね。シグナーにAmaruを憑依させないために。シグナーに生者を殺させないために」

【ああ】
「でもさ、今まで大丈夫だったってことは、Amaruに勝ってきたってことよね？でもAmaruは勝者に取り憑くんじゃ？シグナーを護る者はどうしてAmaruに勝っても大丈夫なの？」

グレイスドラゴンは黙って顔を俯かした。

ここまでできてだんまりは無しよ？

「言いなさい」

【・・・】

「カオス・オブ・グレイスドラゴン。これは主の命令よ」

【・・・】もし憑依すれば、痣が主ごとAmaruを殺すからだ

「納得。だからシグナーを護るシグナーはAmaruと戦えるのね」

【主、悪いがこの運命から逃れる事はできない。主にはつらい思いをさせるが・・・】

「いいわよ」

【!?!】

何よその顔。

英雄助け上等。

そんなおもしろそうなこと逃せるわけないじゃない。

それに、償いにもなるだろうしね。

「やってやるうじゃない。『地縛神Amaru』からシグナーを護りきってやるわよ」

【いいんだな】

「・・・あなたは、あたしのことよく理解してくれてるん、でしょ？」

【・・・ああ、その通りだ。決心してくれてありがとよ、主】

「どづいたしまして」

グレイスドラゴンのやつ、分かっているのかな？
声がとてもつらそうだったこと。

【改めてよろしくな、主】

「こちらこそ」

【主のことは俺が護ってやる。安心して自分の務め果たしな】
「心強いわね。・・・ねえ、グレイスドラゴン」

【何だ？】

「気になってたんだけどさ・・・」

心配いらないよ。

あたしは大丈夫だから。

「メスなんだからその口調やめようよ」

忠告も含めて言ったんだけど、グレイスドラゴンに睨まれた。
やっぱり気に障っちゃった？

【口調に関してだけは主に言われたくねえ!!】

何それ!?

1、自分にとってウザい奴がこの世にいる理由は自分の手で潰すためだ

不幸は連続して起こると知った数日後、この日もまた不幸は起こった。

「ジャック・アトラスが『ドラゴン・ウィング』の持ち主だって言うから来てみれば・・・シグナー勢揃いじゃない」

あたしにはシグナーが判る。

それは痕を通してからではなく、シグナーが従える竜が見えるからだ。

所謂カードの精霊というヤツね。

でも見えるのはシグナーの竜たちとあたしのカードの精霊たちだけで、他の精霊は見えないのよね。残念。

「・・・ねえ、グレイスドラゴン」

【何だ？】

「あたしが他人の精霊で見えるのはシグナーの竜だけなのよね」

【そうだが？】

「あの子と一緒にいる精霊、竜じゃないのに見えたんだけど」

あの子とは、さっき運ばれていった龍亜くんのことだ。

突然行われた敗者復活戦でデュエルしていた龍河ちゃんの双子のお兄ちゃん。

で、その龍亜くんと一緒にいたのが『パワー・ツール・ドラゴン』。

名前に「ドラゴン」についてるけど、種族は機械族のはず。

なのに何で見えるのかな？

それに『パワー・ツール・ドラゴン』に重なって見えたあの影は何？

「あんた何でか知ってる？」

【いずれ知ることだ。今は気にしなくていい】
「・・・ケチ」

ちなみに今までの会話は全部小声。

グレイスドラゴンとの会話は、はたから見たらあたしの独り言にしか見えないもの。

精霊が見える龍河ちゃんは除いてね。

「龍亜くんが運ばれたのは、龍河ちゃんと関係ある？」

【ああ。龍河とあいつの意識は繋がっていたからな。龍河を通して、あいつも精霊界に行った。というよりは、見たと言った方がいいな】
「双子の神秘ね。おっ戻ってきた」

龍亜くんたちと不動遊星たちが観客席に戻ってきた。

お近づきになるチャンス到来！逃してなるもんですか。

「こんにちは」

声を掛けたあたしに遊星たちが振り向いた。

不思議そうに見上げる子供たちとおじいちゃんに警戒心剥き出しの大人たち。

遊星は未成年だけど、大人で十分よね。

にしても、本当に似てるわね。

彼がシグナーなのは、偶然なんかじゃなくて必然な気がする。

「二回戦進出おめでとう不動遊星。そして敗者復活戦がんばったね、龍河ちゃん」

「・・・どうも、ありがとう・・・」

おっとこの子も警戒してたよ。
子供好きのあたしとしてはこの反応はちょっとショック。

「何の用だ」

おっといけないい。

目的を忘れるところだった。

「初めまして。あたしは結城火夜^{ゆいしつかや}。好きに呼んでちょうだい。君達に礼をしに来たんだ。おもしろいデュエル見せてくれてありがとう
って」

半分嘘だけど。

「だから警戒しないでくれるかな」

とは言ってみたけど、やっぱり警戒心丸出し。

あたしの立場としてはそれぐらい警戒心あった方が喜ばしいことかもね。

でもあたし自身はちょっとショック。

「用はそれだけか？」

「ん〜」

これじゃダメだ。

もうちょっと何かお話ししないと。

と言っても、話題は何も無いのよね。

こんな警戒心いっぱいじゃ、シグナーのことも口にできないし。
元からする気もないけど。

観客席の諸君！これからスペシャルでサプライズな企画を発表します！！

「キヤツ！」

考え事の中にでっかい声出されたらビックリするっての！
おかげで遊星たちの前で悲鳴上げちゃったじゃない！

皆さんは入り口の受付で数字の書かれたくじをひかれましたね！
？

そういえば、通ろうとしたら受付の女性に笑顔で引いてくださいって言われたな。

何か逆らい難いオーラを感じたからうつかり引いちゃったけど。
しかも写真撮られたし。名前も書かされたし。

私が今からサイコロを振り、出た目と同じ番号が出た人に、この大会の敗者とデュエルしていただきます！そして！見事勝利すれば、特別選手として二回戦に参戦できます！残念なことがあるとすれば選ばれるのはただ一人だけだ！

何だそのめっちゃくちなルール。

こんな大勢の中から選ばれた人はよっぽど強運な人ね。

なお、選ばれた方の拒否権は受け付けられませんのでご了承ください！
さい！

強制かよ。

選ばれた人がデッキ無かったらどうするつもりなんだろう？

このサプライズは、招待していない中にも強いデュエリストがいるかもしれない。という理由でキングが直々に企画した催しです！
それではサイコロを投げますよ！

てつきり機械でやるのかと思ったら、ごげんよつで出てくるのか
いサイコロを司会者が投げた。

にしてもこのサプライズ、無理があるような気がするのはあたしだけじゃないよね。

こんな大勢の中から強者を選ぶ確率って、めちゃくちゃ低いと思う
んですけど。

というより、よくあのゴドウィンがこんな企画許したわね。

それでは挑戦者を発表します！選ばれたのはこの人だー！

モニターに当選された番号と名前と顔写真がでかでかと映し出される。
る。

って、ちょっと待って！本気で待って！

No.0666！その名も結城火夜ー！！

何これ！仕組みれてんの！？

もしかしてあたしがシグナーだから選ばれたの！？

ちよつと龍亜くんとその友達の眼鏡くん！羨ましそうな目であたし
見るの止めてくれない！？

！
それでは結城火夜さん！デュエルリングに上がってきてください

なんか納得いかない。

デュエル拒否したい。でも拒否権が無い。

ジャック・アトラスの馬鹿！

【選ばれたからには仕方がない。諦める】

おい相棒。

ここは慰めるところであって追い討ちをかけるところじゃないだろ。あ、しかもあなたの声龍河ちゃんに聞こえてたみたい。さっきと違う目であたしのこと見てる。

結城火夜さん？早く上がってきてください！

やめて急かさないで！

デュエルしたくないのにさせられるあたしの気持ち考えて！

「どうしたんだお前。行かないのか？もしかして、デッキが無いのか？」

「デッキはあるけど、デュエルはしたくないんです……」

「えっ！何だよそれ！火夜姉ちゃんはこんな滅多に無いチャンスを逃すつもりなのかよ！？」

龍亜さんに責められた。

もう気分はどん底だよ！

【……諦めてデュエルしろ。その方が良い交流を持てると思うぞ？】

プラス思考ってやつね。

そうよね。うじうじするより、そう考えた方がずっといいわよね。

よっしゃ、やる気出てきた！

「君の言う通りね。あたし、がんばってくる。応援してくれる?」
「もちろんだよ!」

龍亜くんは素直な子ね。癒されちゃう。

にしても階段使って一々下りるのめんどくさいな。
観客席こくから飛び下りようかな?

【やめろ。人外に見られるぞ】

シグナーの時点で人外な気がするのあたしの考えすぎ?

はいはい睨まないでよ。

ちゃんと階段使ってるでしょ?

「ねえ」

【・・・何だ?】

「あれ、もしかして怒ってる?」

【・・・別に】

「怒ってるじゃない、もう……。ゴドウィンさ、爪痕の痣いまだのこと知ってたりするのかな?」

【それはないな】

「きっぱり言うね」

【歴史にも残っていないシグナーをどうして現在いまの人間が知ることが
ができる。主が選ばれたのは偶々だろうし、あんな奴にとつたら「
んなのただの余興よきだろ】

「でしょうね。でも、ホントに偶々なのかな?」

【・・・】

リングに上がると、わっと歓声が上がった。

やべっ、ちよっと緊張してきた。

見事選ばれた結城火夜の最初の相手は・・・炎城ムクロによって一回戦に参加できなかった、別名『蘇る死神』死羅だ!!

・・・誰それ。

「貴様が相手か小娘」

向こう側のフィールドに死羅と呼ばれる男が立っていた。
てか、死羅なんてヤツ、試合に出てたっけ？

「・・・あの」

「何だ？」

「誰ですか？」

「死羅だ！司会者も紹介していただろうが！」

「だって試合出てなかったじゃない」

「それは炎城ムクロに邪魔されたからだ！」

ああ、あいつか。

それじゃ、こいつが遊星の本来の対戦相手だったヤツ？

「あの時炎城ムクロが邪魔しなければ・・・不動遊星を痛めつけてデータ収集ができたものを・・・」

今聞き捨てならないこと聞いたんですけど。
遊星を、痛めつけるですって？

「小娘。貴様には私の憂さ晴らしになってもらおう。恨むなら邪魔をしてきた炎城ムクロを恨むのだな」

いやいや、むしろ感謝するぜムクロさん。

こいつをボロ雑巾にする役目を、俺に与えてくれたんだからな！

「デュエル！！」

結城火夜 LP4000 vs LP4000 死羅

「私のターン、ドロー！私はフィールド魔法『アンデットワールド』を発動」

地面が沢山の髑髏で覆われ、不気味な木が生え、黒い霧がフィールドを覆った。

フィールド魔法『アンデットワールド』の効果によって、フィールドは不気味でおぞましいものへと変化したー！

「このカードの効果によりフィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族とし、アンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚を無効とする。私は更に手札から『ピラミッド・タートル』を召喚」

『ピラミッド・タートル』

ATK 1200

「カードを一枚伏せターンエンド」

「俺のターン。ドロー」

『アンデットワールド』か。厄介なカードだな。それに『ピラミッド・タートル』。

戦闘で破壊されて墓地へ送られた時、自分のデッキから守備力2000以下のアンデット族モンスター1体を自分フィールド上に特殊

召喚できるこれまた厄介なカードだ。
手が無いわけじゃねえけど、ここは様子見とどうか。

「チューナーモンスター『ガード・オブ・フレムベル』を守備表示で召喚」

『ガード・オブ・フレムベル』 チューナー

DEF 2000

「カードを1枚伏せてターンを終了」

おっと結城火夜。『ピラミッド・タートル』の効果を検討し、このターンは何もせずに終了したー！

「私のターン。私は『邪神機 獄炎』を召喚」

『邪神機 獄炎』

ATK 2400

「『邪神機 獄炎』はレベル6のモンスターだが、モンスター効果によりリリース無しで召喚できる」

ただし、フィールドにそのカード以外のアンデット族がない場合エンドフェイズに墓地にいき、プレイヤーは『邪神機 獄炎』の元々の攻撃力分のダメージを受ける。
だが、フィールド魔法『アンデットワールド』が存在する限り、その効果は無しになったと聞いていい。

「バトル！『邪神機 獄炎』で『ガード・オブ・フレムベル』を攻撃！」

「リバーズカードオープン！『攻撃の無力化』！」
「カウンター罠『トラップ・ジャマー』を発動！相手が発動した罠カードの発動を無効にし、破壊する」

しまった！

これであいつは俺の罠を無効にただけでなく、カードを墓地に送ることができる。

益々あいつが有利になっちまう。

「『攻撃の無力化』の効果が無効にしたことにより、バトルは続行される」

(ガアッ！)

『邪神機 獄炎』の攻撃によって『ガード・オブ・フレムベル』が撃破！これで結城火夜を守る壁は無くなったー！

「『ピラミッド・タートル』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「っ……っ！」

火夜 LP4000 2800

「手札から永続魔法『フィールドバリア』を発動。このカードがフィールドに存在する限り、フィールド魔法を破壊する事はできず、フィールド魔法を発動する事もできない。私はこれでターンを終了とする」

「俺のターン」

引いたカードは『ファイティング・スピリッツ』。
これなら、何とかなるかもしれないな。

「俺は『フレムベル・ヘルドッグ』を攻撃表示で召喚」

『フレムベル・ヘルドッグ』

ATK 1900

「魔法カード『ファイティング・スピリッツ』を『フレムベル・ヘルドッグ』に装備する！」

『ファイティング・スピリッツ』の効果は相手フィールドに存在するモンスター一体につき攻撃力が300ポイントアップする装備カード！よって『フレムベル・ヘルドッグ』の攻撃力は・・・

『フレムベル・ヘルドッグ』

ATK 1900 2500

『ファイティング・スピリッツ』

『フレムベル・ヘルドッグ』の攻撃力が『邪神機 獄炎』の攻撃力を上回ったー！

「バトル！『フレムベル・ヘルドッグ』で『邪神機 獄炎』を攻撃」

死羅 LP4000 3900

『フレムベル・ヘルドッグ』

ATK 2500 2200

「『フレムベル・ヘルドッグ』の効果発動！このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、自分のデッキから『フレムベル・

ヘルドッグ』以外の守備力200以下の炎属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる。俺はデッキから『フレムベル・グルニカ』を特殊召喚する！」

『フレムベル・グルニカ』

ATK 1700

「更に『フレムベル・グルニカ』で『ピラミッド・タートル』を攻撃！」

死羅 LP3900 3400

「この瞬間、『ピラミッド・タートル』の効果発動！このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから守備力200以下のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する事ができる！私は『ゾンビ・マスター』を特殊召喚する！」

『ゾンビ・マスター』

ATK 1800

「『フレムベル・グルニカ』の効果発動。このカードは戦闘によって破壊したモンスターのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える。『ピラミッド・タートル』のレベルは4。よって800ポイントのダメージを受けてもらう！」

死羅 LP3400 2600

「ターンエンド」

「私のターン。フツ・・・」

笑った？

何かいいカードでも引いたのか？

「『ゾンビ・マスター』の効果発動！1ターンに1度、手札のモンスターカード1枚を墓地に送る事で、自分または相手の墓地に存在するレベル4以下のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。私は『ゾンビキャリア』を墓地に送り、墓地から『ボーンクラッシャー』を特殊召喚する」

『ボーンクラッシャー』

ATK 1600

『フレムベル・ヘルドッグ』

ATK 2200 2500

「『ボーンクラッシャー』の効果発動。このカードがアンデット族モンスターの効果によって墓地からの特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を破壊する事ができる。私は装備魔法『ファイティング・スピリッツ』を破壊する」

『ファイティング・スピリッツ』が破壊されたことにより、『フレムベル・ヘルドッグ』の攻撃力は元に戻ったが、それでも僅かに及ばないぞー！

馬鹿か司会者！

こいつの墓地にはあのカードがあるだろうが！

「私は墓地に存在する『ゾンビキャリア』の効果発動。手札を1枚デッキの一番上に戻すことで、墓地に存在するこのカードを特殊召喚する。出でよ、『ゾンビキャリア』！」

『ゾンビキャリア』 チューナー
ATK 400

「レベル4の『ボーンクラッシャー』にレベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング！出でよ、『蘇りし魔王 ハ・デス』！」

『蘇りし魔王 ハ・デス』
ATK 2450

俺の墓地に存在するカードがチューナーだったのが唯一の救いかもな。

じゃなかったら『蘇りし魔王 ハ・デス』の方じゃなくて、『アンデット・スカル・デーモン』を召喚されるところだったかもしれないからな。

あいつが『アンデット・スカル・デーモン』持ってたら前提だけど。

「バトル！『蘇りし魔王 ハ・デス』で『フレムベル・ヘルドッグ』を攻撃！」

（ギャン！）

火夜 LP2800 2250

「続いて『ゾンビ・マスター』で『フレムベル・グルニカ』を攻撃！」

（グオオッ！）

火夜 LP 2250 2150

くっ、許せモンスターたち。
仇は必ずとってやるからな！

「ターンを終了」

「俺のターン」

ダメだ！このカードじゃあいつに勝てない。

「・・・チューナーモンスター『ネオフレムベル・オリジン』を守備表示で召喚」

『ネオフレムベル・オリジン』 チューナー
DEF 200

「カードを2枚伏せてターンエンド」

おつと結城火夜！モンスターを守備表示で召喚しただけでターンを終了したー！もはや為す術無しか！？

「私のターン。魔法カード『カップ・オブ・エース』を発動。コイントスを1回行い、表が出た場合は私がカードを2枚ドローできるが、裏が出た場合は貴様がカードを2枚ドローできる」

死羅は懐から出したコインを指で弾き上げた。
コインは回転しながら半円をえがいて落ちた。
出た目は、表。

賭けは成功したー！『カップ・オブ・エース』の効果により、死

羅は2枚カードをドローできるぞ！

「私は手札から『リターン・ゾンビ』を墓地に捨てて『ゾンビ・マスター』の効果発動。墓地から『ボーンクラッシャー』を特殊召喚する」

『ボーンクラッシャー』

ATK 1800

「『ボーンクラッシャー』のモンスター効果発動。相手フィールド上の魔法・罫を一枚破壊する。私は左のカードを破壊する」

げっ、『和睦の使者』が破壊された。

「更に手札から『闇竜の黒騎士』を召喚」

『闇竜の黒騎士』

ATK 1900

「『闇竜の黒騎士』の効果発動。1ターンに1度、相手の墓地から戦闘によって破壊されたレベル4以下のアンデット族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。私は貴様の墓地から『フレムベル・グルニカ』を特殊召喚する」

『フレムベル・グルニカ』

ATK 1700

俺のモンスターをよくも・・・！

フーかコイツの戦法ウゼエ。

名前『死神』から『ゾンビ』に改名しろ！

「バトル！『フレムベル・グルニカ』で『ネオフレムベル・オリジン』を攻撃！」

「リバースカードオープン！『強制終了』！このカードは自分フィールド上のカード1枚を墓地に送り、バトルフェイズを終了させる！俺は『ネオフレムベル・オリジン』を墓地に送る！」

「私はターンを終了。このターンのエンドフェイズ、『ボーンクラッシュァー』は墓地に戻る」

「俺のターン」

ドローしたカードは『威嚇する咆哮』。

守ってくれるのは嬉しいけどよ、そろそろ俺は攻めたいんだけどな。

「カードを一枚伏せてターンエンド」

「私のターン。ドロー」

「リバースカードオープン！『威嚇する咆哮』。このターン相手は攻撃宣言をすることはできない」

「結城火夜！このターンの攻撃はなんとか防いだが、彼女に反撃の術はあるのかー！？」

「『ゾンビ・マスター』の効果発動。私は『馬頭鬼』を墓地に送り、『ボーンクラッシュァー』を復活させる」

「ボーンクラッシュァー」

ATK 1800

「『ボーンクラッシュァー』の効果発動。『強制終了』を破壊する」

万事休す。

これで俺のフィールドは今度こそガラ空きになっちまった。
次のドローでカードが応えてくれなきゃ、俺は終わりだ。

「ターンを終了。エンドフェイズに『ボーンクラッシャー』は再び
墓地へと送られる。諦めたらどうだ？」

「何？」

「貴様の手札は一枚。次のドローで引いたカードが何の役にも立たないクズだったら、次の私のターンで貴様はモンスターたちのダイレクトアタックをくらって終わりだ。惨めな敗北をさらす前に、さつさとサレンダーしたらどうだ？」

おおっと！死羅は結城火夜にサレンダーを迫ったぞ！どうする結城火夜！

サレンダー、だ？この俺が？

しかもあいつ、俺のカードのことクズって言いやがった。

よっぽどぶざけた性格してやがるぜあの野郎。

惨めな敗北をさらすのはどっちか、その目で確かめるがいい！

「俺のターン！ドロー！」

やっとカードが俺に応えやがった。

遅せえぞ全く。

「俺は手札から永続魔法『不平等な魔法取引』を発動！このカードは俺の墓地に存在する魔法カード一枚除外してライフを500払うことにより、お前が使用した魔法カード一枚を選択してこのターン俺も使用することができる。俺が選択するのは『カップ・オブ・エース』！」

火夜 LP 2150 1650

俺は死羅からコインを奪って弾き上げた。

俺の運命を分かっコインが、くるくると空中で回転する。

結城火夜賭けに出たー！当たればカードを2枚ドローできるが、外れれば死羅にカードをドローさせてしまっぞー！

外れる？ありえねえよ。

この運命の賭けは、カードが俺に伝えてくれた結果なんだ。

コインが地面に落ちる。

向いているのは、表だ。

「『カップ・オブ・エース』の効果により、俺は更にカードを2枚ドローする」

当たたー！結城火夜、この絶望的状况で賭けを成功させたー！

当たり前だ。

さて、カードたちが伝えてくれたんだ。

俺もカードたちに応じてやらないとな。

「速攻魔法『シンクロ・コントロール』を発動！ライフを1000払い、このターンのエンドフェイズまでお前の場のシンクロモンスターのコントロールを得る！」

火夜 LP 1650 650

「そして再び『不平等な魔法取引』の効果を発動！墓地の『シンクロ・コントロール』を除外してライフを500払い、もう一度『カ

ツプ・オブ・エース』の効果を発動する！」

火夜 LP650 150

コインが再び宙を舞う。

落ちてきたコインの表側が、日光を受けてちかちかと光っている。

「『カップ・オブ・エース』の効果により再び2枚ドロワー！そして手札から魔法カード『真炎の爆発』発動！墓地に存在する守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する。蘇れ、俺のモンスターたち！」

『ネオフレムベル・オリジン』 チューナー

DEF 200

『フレムベル・ヘルドッグ』

DEF 200

「装備魔法『降格処分』を『蘇りし魔王 ハ・デス』に装備。このカードを装備したモンスターのレベルは2下がる」

『蘇りし魔王 ハ・デス』

x6 4

「そしてチューナーモンスター『氷弾使いのレイス』を召喚する！」

『氷弾使いのレイス』 チューナー

ATK 800

「レベル4の『フレムベル・ヘルドッグ』にレベル2の『ネオフレ

ムベル・オリジン』をチューニング！生きとしモノの生命を炎の糧に、己が力を発揮するがいい！シンクロ召喚！打ち込め、『フレムベル・ウルキサス』！」

（ハッ！）

『フレムベル・ウルキサス』

ATK 2100

「まだまだ！レベル4となつた『蘇りし魔王 ハ・デス』にレベル2の『氷弾使いのレイス』をチューニング！封じられし氷龍よ、今こそ呪縛を解き放ち凍土の世界に降り立て！シンクロ召喚！貫け、『氷結界の龍 ブリユーナク』！」

『氷結界の龍 ブリユーナク』

ATK 2300

ウルキサスが拳と拳をぶつかり合わせ、ブリユーナクが天を貫かんばかりに咆哮する。
やる気満々だなお前ら。

「俺は魔法カード『攻撃封じ発動』。相手モンスター一体を攻撃表示から守備表示にする。俺は『ゾンビ・マスター』を選択」

『ゾンビ・マスター』

DEF 0

「これで舞台は整った。いくぜ！『フレムベル・ウルキサス』で『ゾンビ・マスター』を攻撃！『ファイア・ナックル』！」

(オオオオオオッ！)

「そしてこのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていればその数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与えることができる！」

『ゾンビ・マスター』の守備力は0！これはダイレクトアタックと変わらないぞー！

「ぐっ！」

死羅 LP 2600 500

「相手に戦闘ダメージを与えたことにより、ウルキサスの攻撃力は300ポイントアップする」

『フレムベル・ウルキサス』

ATK 2100 2400

「て言っても、もう勝負はつくけどな！『氷結界の龍 ブリューナク』で『フレムベル・グルニカ』を攻撃！『ブリザード・ランス』」

「ば、馬鹿なー！」

死羅 LP 500 0

ブリューナクの攻撃が決まると、死羅はドサリと倒れた。
ハッ、いい気味だぜ！

デュエル終了ー！これにより、結城火夜は明日の第二回戦に特別

選手として参戦することができるぞー！！

ワアアアツ！と、リングに上がった時の倍の歓声上がる。
どうしよう、勝っちゃった。

明日仕事なのにい・・・。

【主。プラス思考プラス思考。息抜きだと思えよ】

あたしの仕事分かってて言ってるでしょ、グレイスドラゴン。
あーん、勝つんじゃないかった！

1、自分にとってウザい奴がこの世にいる理由は自分の手で潰すためだ（後書き
デュエルの知識ははつきり言って初心者並み（それ以下かもしれないま
せんけど）なので、絶対どこか間違ってると思います。
5D・sまでいくとモンスターも魔法も罫もいっぱいあって目が回
ります。

「蘇る死神」とか言われてるんで死羅のデッキはアンデット族デッ
キにしてみました。

アニメでムクロに投げてたのは炎属性の悪魔族だったような気がし
ますがね。気にしません。気にしたら終わり。

さつそくオリキャラの名前とオリカード出ました。

ネーミングの無さはどうかスルーしていただく存じます。

とりあえずオリカードの説明いきます。

『不平等な魔法取引』
永続魔法。

自分の墓地に存在する魔法カードを除外し、ライフを500ポイン
ト払う事で、相手が使用した魔法カードをこのターン自分のものと
して使用することができる。

2、どうしても仲良くできないヤツはいる

予想通り主が勝った。

まあ、あの程度のヤツが主に勝とうつてのが無理な話だけだな。鼻負じゃねえ、事実だ。

だけど、主は勝ったことがあまり嬉しくないようだ。

「もしもし」

《よっ、火夜。テレビ見たぞ。お前やっとなとデュエリストとしてやっていく気になったのか？》

「部屋壊滅させていい？」

《ふざけんな！》

「そつちこそふざけんな。デュエルはするし好きだけど、目立つのは嫌い」

《でもよ、お前はデュエルしてる時が一番輝いてて、かっこいいと俺は思うぜ》

良いこと言うじゃねえか。俺も同感だぜ。

デュエルしてる時の主はかっこいい！

「はいはい、褒め言葉ありがとう」

《・・・なあ火夜》

「何？」

《もういい加減、止めたらどうだ？》

「冗談でしょ？ふざけたこと言わないでよ。あたしはっ・・・！」

【主！落ち着け！】

俺は咄嗟に主の言葉を遮った。

主に苦しんでほしくなかったし、何より俺がその続きを聞きたくな

かったから。

「……。……テレビ見てたなら分かっているとと思うけど、明日は仕事できないから」

《……仕事しても、ボランティアだけだな》

「そうだけど、あたしにとっては大事な仕事よ……じゃあ切るから」

《待った待った。その前に一ついいか？》

「何？」

《デュエルの時に口調変わるのどうにかしろよ》

「？何言ってるの？じゃあね」

無駄無駄社長さん。

主のアレは無意識だから直そうと思っても直せないんだよ。

おかげで俺もこんな口調になっちまったしな。

俺だって昔はちゃんと「私」って言ってたんだぜ。

信じられない？

うっせえ、食うぞ。

「さてと、明日の対戦表でも見に行きますか」

【その前に遊星たちに会いに行ったらどうだ？龍亜は本当に応援してたと思うぞ？】

「あ！そうだった！っていうか、あたしの目的は本来そっちだったはずなのに！」

【……】

おい、今主を馬鹿にしたヤツ出てこい。本当に食ってやる。

言っとくが俺は馬鹿にしてないからな。

主は普段はこんなんだけどな、いざって時は頼りになるんだぞ。

鼻唄じゃねえって言ってんだろ。

おっとマズい。

「ちょっとグレイスドラゴン？何で戻って・・・」

「火夜姉ちゃん！」

「！」

これで分かったら主。

龍河には俺の姿が見えちまうからな。隠れねえと。

「こんな所まで来てくれたんだ。ありがとう」

「エへへ、どういたしまして！」

「いや、すごかったよ、ねえちゃんのデュエル！」

「凄かったです。よくあの無限蘇生を破れましたね！」

「お前も中々、カードに愛されてるじゃねえか」

「ありがとうございます！」

主のデュエルを見て警戒心がとけたみたいだな。よかったよかった。

「それより対戦表見た？」

「見てない。もう発表されたの？」

「うん。火夜姉ちゃんの対戦相手は、眼鏡掛けた人かアキ姉ちゃんだよ」

「つまりシードってわけね。・・・あんま気乗りしないけど、がんばるか」

ほう、あの『黒薔薇の魔女』と恐れられているアキを『姉ちゃん』

呼ばわりとは・・・いい度胸してるな、龍亜は。

根性あるヤツは嫌いじゃないぜ。むしろ好きだ。

「デュエルするんですか!？」

「何を驚いてるの？あたしは曲がりなりにもデュエリストなんだから、デュエルするのは当たり前でしょ？」

「だって相手はあの黒薔薇・・・ストップ」

眼鏡の坊主の言葉を遮った主は怖い顔をしている。主のあまりの剣幕に坊主がビビッてる。

「人の名前はちゃんと言いなさい。失礼よ」

坊主は何度も首を縦に振った。

主はにつこり笑って坊主の頭を撫でる。

「分かればよろしい。それじゃ、もう一回言ってみようか」

「えっと・・・相手はあの、十六夜アキだよ・・・勝てるの？」

「やってみなきゃ。デュエルは何が起こるか分からないもの」

ウィンクをして主は遊星を見る。

「十六夜アキに勝てたら、あなたとも闘えるね」

「そうだな」

「もし闘うことができたなら、その時はよろしく。お互い悔いの無いデュエルをしましょ」

「勝つ気にいるのか？」

「悪い？」

「いや」

おお、笑った。

美形が笑うとマジでかっこいいぜ。

「・・・あの」

「ん？何かな龍河ちゃん？」

「あなたは、その・・・見えてるんですか？」

カードの精霊のことだな。

どうするんだ主？

「えっと・・・」

「・・・」

主の反応に龍河は目に見えて落ち込んだ。

主は視線をあっちこっちに向けて大忙し。

ちよっとは落ち着けよ。

「あ、あたしが見えるのは、自分のカードの精霊だけなの。他のは何故が見えなくて・・・」

シグナーたちの竜も見えるなんてのはさすがに言えないよな。

お、龍河が笑顔になったぞ。

同類が目の前にいると分かったらそりゃ嬉しいよな。

主も一安心してほっと胸を撫で下ろした。

「えっ！？火夜姉ちゃんもカードの妖精が見えるの！？」

「自分の分だけね」

そう言いながら『パワー・ツール・ドラゴン』に視線を向けるな。

怪しい人にしか見えねえから。

パワー・ツールの兄さんあにも困ったように首傾げちまってるじゃねえか！

「そろそろ帰るわ。明日に備えてデッキ調整したいしね」

「え〜！もつと一緒に話しようよ！・・・そうだ！俺とデュエルしてよ！ねっ？ねっ？いいでしょ？」

押しが強いな。

主が困った顔して引いてるぜ。

「龍亜。無理矢理はよくない」

「そうよ龍亜。それに火夜さんはさっきのデュエルで疲れてるはずよ」

お、遊星と龍河が主のフォローしてくれた。

二人に言われてしょんぼりしちまった龍亜に、主は苦笑して龍亜の頭を撫でた。

「また今度デュエルしよ。えっと・・・」

「龍亜！俺は龍亜！」

「僕は早野天兵です」

「氷室だ」

「わしゃ矢薙つちゅーんじゃ」

本当は全員知ってるけどな。

主は俳優としてもやっていけると俺は思う。

「じゃあ約束ね、龍亜くん。遊星、明日もおもしろいデュエル・・・」

「お待ちなさい」

遊星たちと別れようとしたところに、ピエロのようなチビが現れた。チビの後ろには黒服でサングラスを着用した男が二人。

「結城火夜さん。長官があなたに是非お会いしたいと」

下卑た笑みを浮かべるチビを主は睨みつける。

「お断りします」

「おや、それは困りましたね。拒否するようなら強制的にお連れすることになるのですが・・・」

「ふざけるな」

遊星が主を庇うようにして前に出る。

「結城本人に行く意志はない」

「おやおや。よろしいのですか？ 私たちに手を出せば・・・」

そこでチビは言葉を区切ってイーヒッヒッと笑う。

遊星から怒りと戸惑いを感じられる。

あの野郎、ワザと・・・！

何だか知らないが遊星は治安維持局の奴らに弱みを握られているようだ。

「いいよ、遊星。あたしは大丈夫だから」

「でも火夜姉ちゃん・・・」

「本当に大丈夫だって・・・こんなヤツら軽く捻れるし」

主、すっげー悪い笑顔だよ。

子供たち引いてるよ。大人組みも引いてるよ。チビ共も若干引いてるよ。

「もう一度言うけど、会う気はない。でも伝言はあるの。伝えてくれる？」

「・・・ほづ。それは一体どういった内容で？」

「今のあなたがしていることは、裏切りですねってね」

顔は笑ってるけど、目がカケラも笑ってない。
誰が見ても明らかだ。
怒ってる。

「それじゃあ皆様さようなら」

主、いつまで貴女は背負い続ける気ですか？
あれは貴女のせいじゃない。
無力だと嘆く以前の問題だったんだ！

「グレイスドラゴン」

【・・・】
「改めてやる気出た。そういう意味では、ゴドウィンに感謝しているかも」

【・・・それはよかったな】

俺が何を言っただって、貴女には届かないから。
だから俺は何も言わない。
俺じゃあ貴女を救えない。
でも、貴女が笑っていられるようにするくらいは、できるから。

2、どうしても仲良くできないヤツはいる(後書き)

龍亜は最初アキのこと「魔女の姉ちゃん」て呼んでたけど、この際無かった事に。

3、痛みを隠して（前書き）

親が遊戯王嫌いなのでリアルタイムで最終回見れなかった・・・！
ガクッ。

次は「ZEXALE」ですけど、こんなこと言ったらすっごく失礼だ
とは分かってるんですけど、なんか魅力感じません。
何でだろ？

3、痛みを隠して

許さない！許さない！

人の触れてほしくない過去を暴いたお前を、私は絶対に許さない！
その身をもつて償うがいい！！

「駄目！アキ！」

何かが、私にぶつかった。

ギョツと体を締められて少し苦しい。

でも、とてもあたたかい。

まるであの時のデイヴァインと同じ・・・

「これ以上誰も傷つけないで！これ以上　自分を傷つけないでい
い！！！」

まるで泣いているかのような悲壮で、優しい声。

体を締め付ける力は更に強くなって、本当なんだと思う。

このぬくもりも優しい声も、全部私に向けられているのだと。

ヤツを引き裂こうとしていた紅はヤツに傷一つ付けることなく地に
落ちる。

耳元で、ホッと安堵の息を吐く音。

「ありがとう、アキ」

私の頭を一撫でして、ぬくもりは私から離れた。

それを名残惜しいなどと、思わない。思いたくない。

何故私は、攻撃を止めたのだろうか。

おつと結城火夜、十六夜アキから離れたかと思うと、今度は来宮虎堂に近付いた・・・と思ったらいきなり殴ったー！しかも連打だー！
司会者の実況にハツと顔を上げてみれば、結城火夜と呼ばれた女は来宮虎堂に跨って彼を殴っていた。
しかもグーでだ。

「オラてめえ！人様の過去暴くとはいい度胸じゃねえか！！しかも存在否定までしやがって！！ボコボコにして地獄に墮としてやるうかコラアツ！！！！」

とつくにあなたのせいでボコボコだぞー！誰か早く止めるー！！

警備のヤツらがあいつを止めに集まってきた。

だがあいつは殴るのを邪魔してきたセキュリティも殴り飛ばして虎堂を殴り続ける。

屈強そうな男ですらあいつに殴り飛ばされてしまう。

一体あの細腕のどこにそんな力があるのか。

いやそんなことよりも、何故あいつはヤツを殴っているのだろう。

頭では分かっているのだ。でも心はそれを拒絶する。

魔女である私のためにやっているだなんて、そんなことあってなるものか・・・！

「やめるー！」

警官が何人で止めようとしても殴り続けたあいつは、私の声に腕を振り上げたままピタリと動きを止めて私を振り返った。

紅の瞳が、私に問いかける。

もういいのかと。こいつを許すのかと。
そいつを許す気など欠片もない。
私はただ、お前の不可解な行動をこれ以上見たくないんだ！

「・・・そっか。ごめんね、アキ」

黙ってしまった私にあいつが何を思ったかは知らないが、あいつは納得した様子で来宮虎堂から退いた。
チラッと見えたヤツの顔は、正視できないくらい酷いものになっていた。

「ねえー！司会者ー！」

・・・

「ねえーってばー！」

・・・

「・・・殴るよ」

はいっ！一体何でしょうか！

司会者のビビり様は、理解できないわけではない。
あの場面を見たら誰だってビビる。

「この場合、あたし失格になっちゃうわけ？リングに上がったちゃったし、デュエル止めちゃったし」

そうだ。

如何ような理由があるにしろあいつはデュエルの邪魔をしたのだ。
失格になってもおかしくない。

このままあいつが失格になれば、私は決勝戦に上がれる。
彼女を、傷つけることなく。

「ちょっと！どうなの！？失格なの！？それともアキとデュエルしていいの！？デッキ調整は完璧よ！」

私の思いと裏腹に、あいつはデュエルをしたがっている。

あいつだって、今までのデュエルを見てきたはずだ。

それなのに何故、まだ私とデュエルができないのかを訊く！？失格になれば、傷つかずに済むというのに！

「ちょっと！あたしは気が短いんだから早く言いなさいよ！」
ひっ！

・・・拳は握らないほうがいいと思うが。

構いませんよ

声とともに画面に映し出される、我らが敵である局長のレクス・ゴドウィン。

貴女と十六夜アキのデュエル、認めましょう

認めるだど！？

一体何を考えているんだこいつは！

まだ犠牲者を増やさないと気が済まないというのか！？

このままデュエルを開始しなさい

え、あ、しかし・・・それは・・・

聞こえませんでしたか？続行です

観客席から声上がる。

疲れている今ならチャンスだ、このまま魔女を倒せと。

周りは何を言おうと気にしないが、あいつはどんなのだろうと思いい視線をやれば、顔を顰めて耳を押さえていた。

それではこれより準決勝第三回戦を行います！隣のフィールドに移動してください！

落ちた髪留めを拾って隣に移動する。

その間も変わらず罵声や討伐の声は飛び交うが、気にしない。あいつは変わらず耳を押さえながら移動している。

放たれるオーラが不機嫌そうだが、関係ない。

我らが目的を阻む者は、何であろうと誰だろうと倒すだけだ。

「デュエル！」

十六夜アキ LP4000 vs LP4000 結城火夜

「ドロー。『フェニキシアン・シード』を守備表示で召喚」

『フェニキシアン・シード』

DEF 0

「初っ端からあのモンスターがくんのかよ・・・」

「表側表示の『フェニキシアン・シード』を墓地に送り、手札から

『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚する」

『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』

ATK2200

「ターンを終了」

「俺のターン！」

・・・キレてもいないのに何故あいつの口調は変わっているのだろう。

「俺はチューナーモンスター『氷弾使いのレイス』を守備表示で召喚！」

『氷弾使いのレイス』 チューナー
DEF 800

「カードを1枚伏せてターンエンド」

『氷弾使いのレイス』はレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されないが、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』の効果でダメージは受けることになるぞー！どうする気だー！？

「私のターン、ドロー。チューナーモンスター『夜薔薇の騎士』を召喚」

『夜薔薇の騎士』 チューナー
ATK 1000

「『夜薔薇の騎士』のモンスター効果発動。このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスターを特殊召喚できる。手札から『ロードポイズン』を特殊召喚」

『ロードポイズン』
ATK 1500

「レベル4の『ロードポイズン』にレベル3の『夜薔薇の騎士』を

チューニング」

「あれ、もうくんのか？」

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け。シンクロ
召喚！現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

ATK 2400

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』のモンスター効果。特殊召喚に
成功した時、フィールド上の全てのカードを破壊する。『ブラック・
ローズ・ガイル』！」

紫の花弁が、フィールドの全てのカードを破壊し、上乗せされた私
の力によってフィールド自体をも破壊し、周りを傷つける。
これが私の力。

破壊と恐怖しか与えない忌むべき力！

「『フェニキシアン・クラストー・アマイリス』の効果発動！こ
のカードが破壊され墓地に送られた時、相手に800ポイントのダ
メージを与える！」

「見るだけなら綺麗なんだけどな……ってあちち！そんなでもっ
て痛てっ！」

火夜 LP4000 3200

髪が！髪が燃えるー！と叫びながらあいつは手で髪を叩く。

そしてチリチリになった毛先を見て恨みまがしそうに私を見る。

「願掛けに伸ばしてたのに……ひどいぜアキ」

そんなの知ったことか。

「カードを2枚伏せてターンを終了。自分のターンのエンドフェイズに、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』は守備表示で特殊召喚することができる」

『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』

DEF 0

「俺のターン、ドロロー！『フレムベル・ヘルドッグ』を召喚！」

『フレムベル・ヘルドッグ』

ATK 1900

「『フレムベル・ヘルドッグ』で『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を攻撃！」

「『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』のモンスター効果。相手に800ポイントのダメージを与える」

「あっち！」

火夜 LP3200 2400

「チクシヨー、帰ったら ロナイン塗らねえと・・・『フレムベル・ヘルドッグ』のモンスター効果発動！相手モンスターを戦闘で破壊し墓地に送った時、デッキから『フレムベル・ヘルドッグ』以外の守備力200以下の炎属性モンスターを特殊召喚できる！こい！」
「ネオフレムベル・サーベル！」

『ネオフレムベル・サーベル』

ATK 1500

「『ネオフレムベル・サーベル』でダイレクトアタック！」
「っ……！」

アキ LP4000 2500

「魔女にダメージを与えたぞ！」

「ざまーみる！」

「もつと魔女を痛みつける！」

「魔女を倒せ！！！」

「……カードを1枚伏せてターンエンド」

何だ？

あいつからとてもつもない怒りを感じる。

私に傷つけられても笑っていたあいつが、一体何故？

「……私のターン、ドロ。畏発動、『シンクロ・スピリッツ』。墓地に存在するシンクロモンスターをゲームから除外し、そのシンクロ素材となったモンスターたちを特殊召喚する。私は『ブラック・ローズ・ドラゴン』を除外し、『夜薔薇の騎士』と『ロードポイズン』を墓地から特殊召喚する」

「まさかその伏せカード……」

「更に畏発動、『次元回帰』。ゲームから除外されたモンスターを全てデッキに戻す」

「そりゃねえよ」

掌で目を覆い、あいつは空を仰いだ。

「レベル4の『ロードポイズン』にレベル3の『夜薔薇の騎士』をチューニング。冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！シンクロ召喚！現れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

『ブラック・ローズ・ドラゴン』

ATK 2400

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』のモンスター効果。墓地にいる植物族モンスター一体を除外することで、相手モンスター一体の攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで0にする。『フレムベル・ヘルドッグ』の攻撃力を0にする。『ローズ・リストリクション』」

『フレムベル・ヘルドッグ』

ATK 1900 0

『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果により『フレムベル・ヘルドッグ』の攻撃は0！これが通れば、十六夜アキの勝利だー！！

これで、終わりだ！

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』で『フレムベル・ヘルドッグ』に攻撃！『ブラック・ローズ・フレア』！！」

冷たき炎が『フレムベル・ヘルドッグ』を焼き尽くす。

これで、やつのライフは・・・

「！！！」

「な、何故・・・」

「畏発動、『ガード・ブロック』。このカードは相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動できる。その戦闘ダメージを0にして、カードを1枚ドロウする。まだ俺はデュエルを終わらせる気はねえぞアキ。こんな楽しいデュエル、早々に終わらすもんかよ！」

「！」

楽しい、だと？

傷つけられて、傷だらけになって、楽しいだと！？

「ふざけるな！！」

「うおっ」

「痛いくせに、痛いくせに、怖いくせに・・・一体その何が楽しい！？」

「？痛みはともかく・・・怖くなんて全然ねーけど？」

心底不思議そうにあいつは首を傾げる。

何故恐れない？

「・・・何故だ」

「？」

「何故私を恐れない！？私は魔女だぞ！！」

あいつは今度は反対側に首を傾げて言う。

「それが？」

どうでもいい。

そう言っているように聞こえた。

「アキはアキだ。魔女じゃない。例え本当に魔女でも心はある。アキにだってちゃんと心はあるよ。だってアキは優しいもんな」

浮かべられた笑みにも、言われた言葉にも、嘘が全く感じられない。こいつは本心から言っているんだ。

「・・・っ！私が優しい、だと？お前が私の何を知っていると云うんだ！？」

「確かに俺はアキのことよく知らない。でも、来宮虎堂への攻撃、止めてくれたじゃねえか。俺にはそれだけで十分だ」

何故微笑む？何故優しい言葉をかける？

そんなことしたって、お前には何のプラスにもならないだろう！？

56

「ふざけんな！」

「てめえ魔女に味方するつもりか！？」

「魔女を倒しなさいよ！」

観客は私だけでなく、あいつにまで罵声を浴びせ始めた。

観客はあいつの態度が気に食わないようだ。

ほら見る。

魔女である私にそんな態度をとるから、こつなるんだ。

「まだお前のターンだぜ、アキ」

だがあいつは欠片も気にしていないようだ。
完璧に無視を決め込んでいる。

その態度が観客の罵声に拍車をかけるが、やはり気にする様子は無い。

「・・・私はこれでターンを終了する。エンドフェイズに、『フェニキアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚する」
「俺のターンだな。ドロー。さてさて、どうしたもんかねえ・・・」

手札と『ブラック・ローズ・ドラゴン』に視線を交互に向けながら次の一手を考える。

その顔は笑っていて、本当にこのデュエルを楽しんでいるのが分かる。

「チューナーモンスター『フレア・リゾネーター』を召喚！」

『フレア・リゾネーター』 チューナー

ATK 300

「レベル4の『ネオフレムベル・サーベル』にレベル3の『フレア・リゾネーター』をチューニング！死したモノの命を糧に己が炎を燃え上がらせる！シンクロ召喚！焼き尽くせ、『エンシエント・ゴッド・フレムベル』！」

『エンシエント・ゴッド・フレムベル』

ATK 2500

「『エンシエント・ゴッド・フレムベル』はシンクロ召喚に成功した時、相手の手札の枚数分相手の墓地に存在するカードを選択して

ゲームから除外する。アキの手札は2枚。よって2枚のカードを除外できる。俺は『夜薔薇の騎士』と『ロードポイズン』を除外する！」

墓地から選択された2枚のカードが取り出される。

「そして除外したカードの枚数×200ポイント攻撃力がアップし、『フレア・リゾネーター』の効果により更に300ポイントアップする」

『エンシエント・ゴッド・フレムベル』

ATK 2500 3200

「バトル！『エンシエント・ゴッド・フレムベル』で『ブラック・ローズ・ドラゴン』を攻撃！」
「くっ！」

アキ LP2500 1700

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

「私のターン、ドロー！『イービル・ソーン』を召喚！」

『イービル・ソーン』

ATK 100

「そしてこのカードをリリースし、相手に300ポイントのダメージを与える！『イービル・バースト』！」

弾けた『イービル・ソーン』の針が、あいつの足元に飛んで爆発する。

ここまででは良かった。
でも誤算が生じた。

「いつ・・・！」
「！！！」

針の一本が、あいつの腕に突き刺さった。
あいつは痛みを堪えるためかしゃがみこみ、声を出さないように唇を噛んでいた。

こんなつもり、なかったのに。

沢山の声が聞こえる。

でも何を言っているのか分からない。

頭が真っ白になって、何も考えられない。

こうしている間も、あいつの腕からは血が流れている。

でもどうしたらいいのか分からない。

誰か、誰か・・・！

だ、誰か救護班を！このデュエル即刻ちゆう・・・

「ちつとは静かにしゃがね！！傷に響くだろうが！！！」

響いた声にハッと顔を上げれば、顔を真っ青にさせたあいつがキッと観客たちを睨んでいた。

「ピーピーギヤーギヤーうっせえんだよ！これ以上くだらないうこと喋りやがったらあいつらみたいに相手にやるぞコラアツ！！！」

観客たちの声が一斉にピタリとやんだ。

それを嘲笑うかのように一笑した後、あいつは眉を顰めながらも私に微笑んだ。

「ごめんなアキ。これ以上はデュエルできそうにないや」

痛いくせに、それでもあいつは微笑む。

何故お前をそんなふうにした私に微笑む？

「何故・・・」

「何故何故って、質問が多いなアキは。・・・悪いけど、これ以上は勘弁してくれ」

まるで子供を宥めるような口調だ。

そしてその声はどこまでも優しい。

あいつはゆっくりと左腕を動かして、デッキに右手を当てる。

「サレンダー」

あいつは1度顔を上げて、満足そうに笑んだ。

「楽しかった。またデュエルしよう、アキ」

そして駆けつけた救護班を断ってあいつはフィールドから立ち去った。

その顔には始終笑みが浮かべられていた。

4、非現実なことも神経が図太けりゃ大丈夫

傷を負った腕でD' ホイールを走らせるのはとても酷だった。それでも何とか家に戻れたのは、泣きそうな声であたしの名前を呼び続けてくれた相棒のおかげだ。ただど頑張れたのはそこまでだった。家に着いた途端、あたしの意識は途切れた。

【主！主！】

最後に聞こえたのは、グレイスドラゴンの泣きそうな声。そして最後に感じたのは、熱い疼き。

+++

風を感じる。

私は宙を、眼下を奔る二人と共に奔っている。流れるのは星と、星の歴史。

星屑の竜が、赤き悪魔の竜に閃光を放った。

+++

目が覚める。いつもの天井。
ふかふかの布団の感触もいつも通り。
でもそれっておかしい。
何であたしはベットに寝ているの？
もしかして、もうあの人たちが来たの？

「主！目が覚めたのか！」
「うん。大丈夫だよ、グレ・・・どちらさま？」

グレイスドラゴンの声があったから振り向いてみたら、見知らぬ美人さんがそこにいました。

灰色の長い髪に空色の瞳、白い肌にふつくらとした唇。おまけに小顔。

着ているのが黒のタートルネックに白い着物（肩のところ着崩している）で、下はレギンス。（何で分かるかって？裾の部分が大分開いているからさ）

現代と過去のコラボレーションだね。
って、そんなこと言ってる場合じゃない。
美人さんは困ったように笑って言う。

「俺だよ。グレイスドラゴン」

「・・・はい？」

「赤き竜の力だよ」

「赤き竜の？」

「痣を通して主に力を与えたみたいだな。サイコパワーみたいなもんだ」

マジで？

「え〜・・・」

「これぐらいで根を上げるなよ主。もつととんでもないことがこれから先起こるから」

「何それ確定？」

「おう！」

もう一回言う。

え〜。

「・・・まあ、百歩譲って実体化させたことは認めるけど、何で人間になつてんの？」

「力が強い精霊は、人型になれるんだ。ちなみにシグナーの竜たちも人型になれるぜ。みんな美形」

んなこと訊いてませんけど？

でも良いこと聞いた。

「でも本当に良かったぜ。赤き竜が力を貸してくれて。じゃなかったらどうなつてたことか・・・」

「大袈裟。死にはしないよ」

「馬鹿なことを・・・針が消えなかったから良かったものの、じゃなかったら出血多量で死んでたかもしれないんだぜ」

「アキの優しさだな」

「・・・もういいよ。主がそれでいいなら」

やっぱりアキはいい子だな。

あ〜、にしても痛い。

思い出した途端痛みが復活した。

しかもなんか熱い。

「グレイスドラゴン」

「何だ？」

「夢見た」

「どんな？」

「星の民の歴史。その中で闘う遊星とジャック。勝ったのは遊星」

「それ夢じゃなくて現実」

「やっぱり？」

「赤き竜が見せたんだろ」

「どつりで腕が熱いわけた」

包帯の上からでも光るのね、この痣。

遊星たちの前では気をつけよう。

「・・・グレイスドラゴン」

「何だ？」

「薄っすらしてきたね」

「主が力のコントロールができるようになれば、いつでもこうやって触れられるぜ」

右手に重ねられる白い手。

臃げな手はしっかりと体温を伝えてくる。

「・・・がんばってみる」

【おう、がんばれ】

あゝあ、ドラゴンに戻っちゃった。
美人だったのに。

「こっからが大変なんだろうね」

【氣イ引き締めろよ。Amaruのやつは卑劣なヤツだからな】

「安心しなさい。役目はしっかり果たす」

死んでも彼らを護ってやる！

4、非現実なことも神経が凶太けりや大丈夫（後書き）

5・Dsが終わった寂しさからどうしてもこっち書いちゃいますね。次は「闇に囚われし番人」を更新しようと思います。（ここで言うな）
でもやっぱりこっち更新しそう。。。 （じゃあ言うな）

5、注意事項は初めに言ってほしい

「はあ〜っ・・・全く父さんのヤツ・・・」

【まあまあ主。それだけ心配だったんだよ】

「だからってね・・・」

大事な会議放つぽりだしてまで来るなつてのよ。
心配してくれるのは嬉しいけどさ。

「父さんよく社長なんてやれてるわね・・・しかも一大企業の」

【まあまあ】

「そういえば、母さんも言ってたっけ？出産する時大変だったって。
父さんが」

【まあまあ】

まあまあって、さっきからそればかりね、グレイスドラゴン。

「さてと、こうしちゃいられない」

【？どこ行くんだ主】

「ジャックのそこ」

病院には入れないだろうけど、見張るぐらいはね。

今のジャック狙われたら厄介なもの。

ただでやられるようなヤツじゃないだろうけど。

【おいおい主。せめて腕の怪我完治してから行けよ】

グレイスドラゴンが（多分）眉を顰めて右腕に視線を向ける。

丁寧に巻かれた包帯の下にはまだ治りきっていない傷。

グレイスドラゴンは怪我させたことに怒ってたけど、あたしはむしろラッキーだと思ってるんだけどな。だってこれを理由に右腕見せずに済むもん。

「そんな悠長なこと言ってられないよ」

【ほう・・・俺達の心配を無下にする気か？】

ん？達？

【後ろ後ろ】

言われて振り向いたらカードの精霊達がいた。ビックリした！心臓飛び出るかと思った。

「あう・・・」

しかもみんなあたしのこと無言で見つめてくるし。

グレイスドラゴンだけなら何とかなっただけど、これじゃあ・・・でも、やっぱり駄目だ。

誰が何と言おうがあたしはあたしの使命を果たすわよ！

「そ、そんなに見つめても、あたしは行くからね！」

って、しょんぼりしないでよー！

「もうあんたたち・・・っ!？」

突然、痣が疼きだした。

今までの比にならないくらい熱い。

てか腕の痛みと重なって倍痛い！

【悠長にしてる時間、本当になかったみたいだな。お客さんだぜ】

窓を開けて外を見れば、そこには一人の女がいた。
でも変だ。

何が変わかって訊かれたらうまく答えられないけど、そう、なんとい
うか……

「グレイスドラゴン、何でだろう……あの人から生気を感じない
の」

【……】

「グレイスドラゴン？何か知ってるの？」

【……アレは、Amaruが操ってる死体だ】

「！？どういう意味グレイスドラゴン！」

【あいつは死体を操れるんだ。自分の魂を移してな】

何、ですって……!？

「何でもっと早く言わなかったのよ!」

【冷静さを失うのが目に見えていたからだ!】

「!」

頭の上つっていた血がすつと引いていく。

グレイスドラゴンの言う通りだ。

こんなことで、冷静さを失うなんて……。

「シグナーたちを護れないじゃない……」

誓ったんだ。

何がこようが誰が相手になろうが、護るって。

「　いくよ、カオス・オブ・グレイスドラゴン」

【ああ】

デュエル・ディスクを装着して窓から飛び降りる。

女は、否 Amaru はあたしを見て、蛇を思わせるような笑みを浮かべた。

「《初めまして、『ドラゴンズ・ガーディアン』の痣を持つ娘よ》

女の声に重なって聞こえた声は、身の毛のよだつような気持ち悪いものだった。

「・・・ご丁寧にも、Amaru。わざわざやられに来るなんてね」

「《クック・・・今宵はただのご挨拶だ。せいぜい楽しませてくれ》

死者を愚弄しておいて挨拶ですって？

舐めてんのかあの野郎！

「「デュエル《デュエル》！！」「」

火夜 LP4000 vs LP4000 Amaru (仮)

デュエルの合図とともに周りを紫の炎に包まれた。

夜中じゃなかったらどうしてくれたんだ全く。

「先攻は貰うぜ！俺のターン、ドロー！『トライデント・ウォリア

ー』を召喚！」

『トライデント・ウォリアー』
ATK 1800

「『トライデント・ウォリアー』のモンスター効果。このカードが召喚に成功した時、手札からレベル3のモンスター1体を特殊召喚できる。俺は『シャインナイト』を守備表示で召喚！」

『シャインナイト』
DEF 1900

「カードを一枚伏せてターンエンド」
「《我のターン、ドロー。我は『ナチュル・パンプキン』を召喚》」

『ナチュル・パンプキン』
ATK 1400

ナチュル？

卑劣な性格に似合わず可愛らしいカード使っな。

【主、ちよつといいか？】
「何だよ」

【Amaruが操る死体のデッキは、その死体本人が生前使っていたデッキなんだ。それ以外は使えない】
「思ったより制限激しいな。あとそついうのは早めに言え」

【悪い】

生前使っていたデッキしか使えないか・・・きつと死んだ持ち主の思い入れが強いからだろうな。

「《話は済んだか？『ナチュル・パンプキン』の効果。相手フィールドにモンスターが存在する時にこのカードの召喚に成功した場合、手札から『ナチュル』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。我は『ナチュル・スタッグ』を手札から特殊召喚する」

『ナチュル・スタッグ』

ATK 2200

「《更にこのカードは、自分フィールドに存在する『ナチュル』と名のついたモンスターの効果が発動したターン手札から特殊召喚できる。『ナチュル・ハイドランジー』を特殊召喚！》」

『ナチュル・ハイドランジー』

ATK 1900

「初っ端からモンスター三体とか勘弁しろよ！畏発動、『威嚇する咆哮』！このターン相手は攻撃宣言できない！」

「《フン・・・カードを一枚伏せてターンエンド》」

「俺のターン、ドロォー！」

三体のモンスターに伏せカード一枚か・・・俺の手札には今破壊力
カードが無いからな。
こうなりや攻めだ。

「チューナーモンスター『夜薔薇の魔女』を召喚！」

『夜薔薇の魔女』 チューナー

ATK 1700

「レベル4の『トライデント・ウォリアー』にレベル4の『夜薔薇の魔女』をチューニング！戦いの火蓋は切られた！戦士の魂を胸に拳を握れ！シンクロ召喚！立ち上がれ、『ギガンテック・ファイター』！」

『ギガンテック・ファイター』

ATK 2800

「『ギガンテック・ファイター』は墓地に存在するモンスター一体につき攻撃力が100ポイントアップする」

『ギガンテック・ファイター』

ATK 2800 2900

「『ギガンテック・ファイター』で『ナチュル・スタッグ』を攻撃！」

「《永続罨『スピリット・バリア』を発動。モンスターが私のフィールドに存在する限り、我はダメージを受けない》」

ちっ、めんどくせえカード使いやがって。

「カードを一枚伏せてターンエンド」

いつ誰が来るかわからないこの場所で、勝負を長引かせるわけにはいかない。

さっさとケリつけねえと。

「《私のターン、ドロ。チューナーモンスター『ナチュル・トライアンフ』を召喚》」

『ナチュル・トライアンフ』 チューナー
DEF 1500

「《レベル4の『ナチュル・パンプキン』にレベル2の『ナチュル・トライアンフ』をチューニング。シンクロ召喚！来い、『ナチュル・パルキオン』！》」

『ナチュル・パルキオン』
ATK 2500

「《手札から魔法カード『ガオドレイクのタテガミ』を発動。自分フィールドに存在する『ナチュル』と名のついたモンスター一体の攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで3000にする。ただし、このカードの対象となったモンスターの効果はエンドフェイズまで無効化される。我は『ナチュル・パルキオン』を選択！》」

『ナチュル・パルキオン』
ATK 2500 ATK 3000

攻撃力アップは厄介だが、モンスター効果が無くなるのは助かる。
『ナチュル・パルキオン』の効果は正直言って厄介だからなあ。
でもあいつがあのかード持ってたらヤバいな。

「《手札から魔法カード『パルキオンのうろこ』を発動。このカードは自分フィールドに『ナチュル』と名のつくモンスターが存在する時発動できる。このターン相手は畏カードを発動できない》」

持ってたあああああああ！

「《バトル。『ナチュル・パルキオン』で『ギガンテック・ファイ

ター』を攻撃！』

「ぐー！」

火夜 LP4000 3900

何だ、これ！？

デュエルで実際に衝撃が！

だがこの衝撃、サイコパワーとは違うぞ！？

「更に『ナチュル・スタッグ』で『シャインナイト』を攻撃！」

やべっ！

「『ナチュル・ハイドランジ』でダイレクトアタック！」

「ああっ！！」

火夜 LP3900 2000

「《ターンエンド》」

「クソッ、どいう仕掛けしてやがるんだ……俺のターン！ドロ
ー！」

ポタツと水滴が落ちる音がして視線をやれば、右腕から血が出てい
た。

さっきの衝撃で傷口開いちゃったんだ。

良かった、ドロ・した時腕平行にしといて。

カードに血がつくところだっただぜ。

「チューナーモンスター『トラップ・イーター』を特殊召喚！」

Amaruのフィールドにあつた『スピリット・バリア』を食べて
モンスターが俺のフィールドに現れる。

『トラップ・イーター』

ATK 1900

「このカードは相手フィールドの表側表示の罠カードを一枚墓地に
送ることで特殊召喚できる！」

「《クク・・・運のいいヤツだ》」

「運も実力の内だ！覚えとけ！更に手札から『地獄戦士』を召喚！」

『地獄戦士』

DEF 1400

「いくぜ！レベル4の『地獄戦士』にレベル4の『トラップ・イ
ター』をチューニング！破滅の闇が存在を呑みこむ。終焉の闇よ、
蠢け！シンクロ召喚！滅せよ、『ダークエンド・ドラゴン』！！！」

『ダークエンド・ドラゴン』

ATK 2600

「『ダークエンド・ドラゴン』で『ナチュル・パルキオン』を攻撃
！『ダーク・フォッグ』！！！」

Amaru(仮) LP4000 3900

ライフポイントが減ったことでAmaruにも衝撃波が襲うが、あ
いつは涼しい顔をして立っていた。

わあ、ムカつく。

そりゃたった100だけだよ、それでもなんらかのリアクションは

してくれてもいいんじゃないの？

「ターンエンド」

「《私のターン。ドロ。『ナチュラル・クリフ』を召喚》」

『ナチュラル・クリフ』

DEF 1000

またメンドくせーカード引きやがって！

「《『ナチュラル・ハイドランジー』を守備表示にし、ターンエンド》」

『ナチュラル・ハイドランジー』

DEF 2000

「俺ターン！ドロー！」

その時だ、痣が一層強く疼いたのは。気のせいかな輝きも強くなってる。

「《始まったか》」

「！何がだ！」

「《決まっているだろう。ダークシグナーとシグナーによる闘いだ！まあ、今闘っているのはただの駒だな》」

駒？つまり、闘ってるのは本物のダークシグナーじゃないってことか？

なにしろ、今は闘ってるシグナーが無事であることを祈るしかねえ！

「《残念だ。この目でシグナーが殺されるところを見たかったのに》」
「なっ!?ざっけんなんてめえ!!シグナーたちは負けねえ!!そして俺もな!!魔法カード『貪欲な壺』を発動!墓地に存在するモンスターカードを五枚デッキに戻し、その後二枚ドロする!俺は『トライデント・ウォリアー』『シャインナイト』『夜薔薇の魔女』『トラップ・イーター』『地獄戦士』をデッキに戻し、ドロ!」

これならいける!

「魔法カード『ブラック・コア』を発動!自分の手札を一枚捨て、フィールドに存在するモンスター一体を除外する!俺は『ナチュルクリフ』を選択!」

「《・・・》」

「まだいくぜ。『ダークエンド・ドラゴン』のモンスター効果発動!攻守を500ポイント下げること、相手フィールド上のモンスター一体を破壊する!対象は『ナチュル・ハイドランジー』!」

『ダークエンド・ドラゴン』の胸にある顔の口から黒いものが吐き出され、それが『ナチュル・ハイドランジー』を呑みこむ。

「そして『ダークエンド・ドラゴン』でAmaruにダイレクトアタック!『ダーク・フォッグ』!」

「《ぐっ・・・!》」

Amaru(仮) LP3900 1800

「更に罨発動!『リビングデットの呼び声』!俺の墓地からモンスター一体を攻撃表示で特殊召喚する!戻って来い、『ギガンテック・

ファイター』！」

地面を割って『ギガンテック・ファイター』が雄叫びを上げて復活する。

Amaruは大きな舌打ちをして、俺を見てニヤリと笑った。

「《今宵はここまでか・・・だが次はこう簡単にはいくまいぞ》」
「・・・フィニッシュ」

『ギガンテック・ファイター』の拳がAmaruを、屍を打つ。衝撃に耐えられず吹っ飛ばされた体は、炎の壁を越え地面を二、三度バウンドして停止した。

炎の壁は消え去り、あたしはピクリとも動かない屍に近づく。屍の体は足の方から徐々に砂へと成り、風に舞う。

見下ろした屍の顔には、さっきのAmaruが浮かべた笑みとは異なる笑みが浮かんでいた。

虚ろな目が、あたしをしつかりと見ている。

「ありがとう」

屍は笑って大切にカードを握りしめる。

それを最後に、さらさらと女は消えた。カードも。

まるで女と共にするかのよう。

「・・・勘違いしないで」

礼を言われる筋合いなんてない。

笑いかけられる筋合いなんてない。

「あたしはあたしの使命を果たしただけ」

だから、掻き乱さないで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384r/>

遊戯王5D's ~ 英雄の影 ~

2011年10月7日11時00分発行